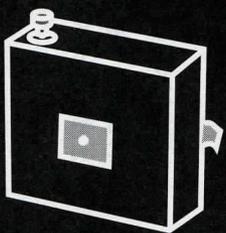


# 針穴だけのカメラが写す アートな風景

## ピンホール写真



（以下は非常に薄い文字で印刷された文章の抜粋です）

針穴カメラは、レンズを必要としないカメラの一種である。その原理は、光の直進性を利用している。小さな穴（針穴）を通して光が進入し、反対側のスクリーン上に倒立した実像を形成する。この現象は、小孔成像と呼ばれる。針穴カメラは、非常に浅い景深と、独特のボケ（ボケ）を特徴とする。また、光の回折効果により、写った風景に独特の柔らかい雰囲気や、星状の光漏れ（ボケ）が生じる。針穴カメラは、アートな表現手段として広く知られており、多くのアーティストがその可能性を追求している。

最近、携帯電話を買い換えたら、写真機能がついていた。なにしろ、機械オンチなので、携帯といえばこれまで電話をかけるか受けるかしかできなかった。だが、携帯写真も覚えてしまえば便利なものである。さっそく写メールにはまっていた。とほほ。

しかし、このデジタル全盛の時代に、あくまでアナログの良さを追求する人たちがいる。

林敏弘さんもその一人だ。

ピンホール写真をご存知だろうか。文字通り、ピン先ほどの穴で撮った写真のことだ。ピンホールカメラには、レンズの代わりに小さな穴があいているだけなのである。

こんなカメラで撮れるのか？

疑問に思うかもしれないが、ちゃんと撮れるのである。

林さんは、ピンホールカメラを使って、独自の作品を生みだしているピンホール・アーティストだ。

そもそも、レンズがないのになぜ写真が撮れるのか。

レンズカメラが光の焦点を合わせて、効率よくスピーディーに撮れるようになっていたのに対し、ピンホールカメラでは、小さな穴から入ってきた生の光で焼き付ける。少し時間はかかるが、十分な光さえあれば撮れる。

しかも、レンズのカメラと違って焦点がない。レンズ付きのカメラでは、焦点は一点に合って、それより近かったり遠いものは焦点がぼける。しかし、ピンホールカメラでは、近くのものも遠くのものも等しく撮れるのである。

ただし、シャープには撮れない。でも、そのソフトなぼけが面白いがなんともいえない味をだすのである。

林敏弘さんは、ピンホール写真のそのような持ち味を生かした作品を撮り続けている。

ところで、ピンホールカメラって、どこかで売ってるんですか。

林さんがいつも使っているのは、Zeroimage社の製品であるZero2000というピンホールカメラだが、家にある材料と道具だけでも手づくりできるのだという。

手づくりしたピンホールカメラは、正直いって、あまりカッコよくはない。で

きあいの紙箱にシャッター代わりの黒テープがはつてあるだけ。林さんも、外でピンホールカメラを使っていると、行き交う人に、物珍しそうに見られるという。空き地で撮影していたところ、測量していると思われる、隣家のおばさんに、怪しい不動産屋からの派遣と間違えられたこともある。

ま、とにかく、カメラは見かけではない。腕で勝負だ。

「僕は、あまりピンホールカメラの製作には興味がなくて、それを使った作品づくりを主眼としています」

カメラは壊れたら買い換えればいいが、作品は失ってしまったら二度と手に入らないからだという。

ところで、ピンホールカメラをもって戸惑うのは、ファインダーがないことだ。

そう、ピンホールカメラにはファインダーがないので、被写体をのぞいて見ることができないのだ。つまり、どのように撮れているかは、現像してみないとわからないのである。

だが、林さんによると、そこがまたピンホール写真の魅力なのだという。ねらいがはずれることもあるが、予想外にいいものが撮れることもあるというのだ。

林さんは、子どものお父さんにカメラを買ってもらって以来、写真を趣味にしていた。

そんな林さんがピンホール写真に目覚めたのは、ピンホール写真家エドワード・レビンソンの写真に合ってからである。

レンズカメラの六〇分の一秒とか二五〇分の一秒とかいうシャッター速度は、人間の感覚にはない速さだ。

ところが、時間をかけて露光するピンホール写真は、人間が見ている速度に近いのではないか。ピンホール写真に惹かれるのは、人間の見る速度に似ているからではないかという。

林さんが好んで被写体にするのは、廃墟のコンクリートや鉄であったり、道ばたの雑草であったりする。

これらは、ふつうに撮ったら、殺伐とした写真になる。しかし、ピンホールカメラの柔らかい画質の写真は、なぜか心をやわらげる。

林さんは、最初、きれいなだけの風景写真を撮ることに興味はなくて、モノクローム写真で街を撮り続けた。

あるとき、都会や郊外、田舎と都会の中間などのバランスの崩れたイメージに惹かれていった。一五年くらい前のことだ。

そのテーマを認めてくれたのは、ニューヨークのチェルシーで作家活動や教育をしている、写真家の栗田紘一郎さんだという。

林さんのとらえた、「境界」の風景は、殺風景でありながら、どれもすばらしい情感がこめられている。

小さな穴ひとつのピンホールカメラが、魔法の箱のように思えてきたのだ。た。

撮りたい被写体をねらって、カメラをだいたいの方向に向け、シャッター作りの黒テープをはずす。

レンズ付きカメラと違って、ピンホールカメラの露出時間は長い。数秒から二、三分くらいの時間がかかる。ピンホールから入る光は非常に弱いからである。

しかし、最初からうまくいくとは限らない。現像してみたら、印画紙が真っ黒になっていることもある。

露出オーバーか、あるいは箱から光がもれているか、どちらかである。

光の強さ、露出時間は、試行錯誤で慣れていくしかない。

アナログだからこそ、こうした苦勞もつきないのである。その代わり、成功したときにはデジタルにはない喜びがある。

林さんのホームページ↓<http://www.toshi-photo.com/jpwelcome.html>